

「ワーク」で、取材の観点を確かめる

これまで五回にわたり、子どもたちの言葉の力を育む授業を行つたための、デジタル教科書を活用した事例をご紹介してきました。最終回の今回は、写真や「ワーク」を使って、書くための取材の観点を学習する実践をご紹介します。

1 「書くこと」の学習過程「取材」

現行の学習指導要領において、「書くこと」領域の指導事項は、「課題設定や取材」「構成」「記述」「推敲」「交流」という、五つの学習過程から構成されています。

このうち、「取材」とは、文字どおり、経験・想像・考えたことをもとにしたり、調べたりして、書くために必要な事柄を集めたり整理したりすることです。教科にかかわらず、児童が日常的に行っている活動といえます。ただ、指導の点からいうと、「よく見てね」「詳しく調べて」などと声をかけることの他に、どのような手立てを講じれば、児童に取材の力が身につくのか、教えることに難しさを感じていらっしゃる先生方も多いのではな

いでしょうか。

そこで、今回は、取材の力を身につけさせるための、デジタル教科書の意図的・効果的な使い方について考えてみたいと思います。私のこれまでの実践の中から、取材の指導に重点を置いた単元「ていねいにかんさつして、きろくしよう」(二年上「かんさつ名人になろう」)の事例をご紹介します。

2 「かんさつ名人になろう」(二年)

「かんさつ名人になろう」では、対象をさまざまな観点から丁寧に観察して書く言語活動が位置づけられています。これまでに児童は、生活科の時間に大切に育てたキュウリの生長を楽しみにする日々を送っていました。ですから、キュ

ウリの生長の具合をよく見て記録することとは、児童にとって意欲的に取り組める学習活動といえます。本実践では、「書くこと」の指導事項の中でも「取材」に重点を置き、丁寧に観察して詳しく記録することを学習させたいと考えました。

観察をさせる場合、「よく見てね」と言っても、具体的に何を見ればいいのか、よく見るとはどういうことなのか分からない児童も少なからずいます。そこで、観察をする前に、デジタル教科書を活用して、生活科での観察の学習を振り返る活動を設定することにしました。

(1) 単元の指導目標

◎丁寧に観察し、題材に必要な事柄(気づいたことや分かったこと)を集めることができる。(書(1)ア、伝国(1)イ(ア))

○観察対象の様子や自分の気づきなどが相手に伝わるように題名を付け、工夫して書くことができる。(書(1)イ)

・書いたものを読み合い、よいところを見つけて感想を伝え合うことができる。(書(1)オ)

《言語活動》観察したことを記録する文章を書く。

(2) 単元の指導計画(全十四時間)

▼第一・二時

学習の見通しをもち、対象を決めて丁寧に観察する。

・「観察名人になるために、丁寧に観察し、気づいたことを記録しよう」という学習課題を設定し、学習の進め方を確認する。

ここで活用!

・生活科などで観察したことを振り返り、気づいたことを話し合い、五感を使うことが、詳しく観察することにつながることを確認する。

▼第三・四時

観察したことを記録する文章の書き方を理解する。

・教科書P37の作例を読み、観察記録文を書くときに大切なことを整理する。

3 活用のポイント(第二時)

■写真を使って、観点を確認する

本学級の生活科では、この時期までに、大きさ・形・色などに着目してキュウリを観察し、その生長を観察カードに記録し続けてきました。なかには、葉の枚数や茎の長さに着目して書くことができるようになってきた児童も見られました。

・教科書P38の二つの作例を読み比べ、続けて記録していくと、変化の様子がよく分かることを理解する。

▼第五・九時
観察記録文を書く。

▼第十・十一時
観察記録文を友達と読み合い、よく観察できている点、よく表現できている点をカードに書いて交換する。

▼第十二・十三時

カードを読み、自分の観察記録文を書き直す。

▼第十四時

学習の振り返りができるように、観察記録文を書くときに大切なことを「観察名人の技」として、教室に掲示しておく。

ただ、観察の観点や表現のしかたに十分な点が見受けられました。そこで、本時では、そうした生活科での学習を再確認することを通して、新たな観点到気づかせることと、観察したことを、どう表現するとよいか考えさせることをねらいました。

授業の初めに、生活科の時間に撮影したキュウリの花の写真(次ページ図1)をパソコンに取り込んでおき、それを電子黒板で提示します。大きく表示された写真をみんなで見ながら、それぞれの観察記録カードに書かれている文章を確認していきました。

花は、きいろです。花のまんかに、きみどりいろをしたまあるい花みたいなのが、あります。花の中に、また花があつてふしぎです。

というAさんの文章や、

花は、きいろです。花のまわりは、ぎざぎざしています。

というBさんの文章を紹介し、色や形について書くと、生長の様子が分かりやすいことを、まず確かめました。こうして全員で確認したことは、「観察名人の技」としてまとめていきます。



東京都生まれ。横浜国立大学大学院教育学研究科修了。横浜市内の公立小学校教諭、主幹教諭を経て、現職。専門分野は、教育工学(授業設計、情報教育)、教科教育法。共著書に『タブレット端末で表現する協働的な学び』(フォーラムA)など。



▲図2：ワーク「どこをどのようにかんさつしますか」

次に、写真の○印の部分拡大して提示しました。児童がそれを見つめるなか、教師は、拡大した部分を黙って指さしました。

児童C 先生、花の下に小さいぎざぎざしたのがあるよ。

児童D 本当だ！

児童E あった、あった。

児童F ちっちゃいキュウリみたいだ。

さまざまな意見が教室の中を飛び交います。

教師 そうだね。Cさんは、この長いところに気がついて、カードに書いていたんだね（気づいた子を褒める）。でも、これって小さいからよく見ないと分からないんだよね。Cさんは、花の後ろの方まで見たから気がついたんだね。すごいね！

ここで、「観察名人の技」に、「いろいろな方から見る」という項目を付け足しました。合わせて、生活科での学習を振り返りながら、見るだけでなく、匂いをかぐ、触る、耳を澄ますなど、五感を使



▲図1：電子黒板で提示したキュウリの花の写真

うことで、詳しく観察することができるよう、このことを再度押さえるようにしました。

この後も、児童が写真を見て気づいたことから、観察の観点を抽出していきました。それを通して、児童は、これまでの自分の観察に足りなかった新たな観点に気づくことができたようでした。

■観察のしかたを確認する

観察するときに必要となる観点について確認することができたので、次は早速、書き方の学習へと進みたいところです。

発言していききました。

教師 ザリガニ君を「いろいろな方から見て」、何かがついた人はいいますか。

児童G 手に取ってこうやって見ると

（指でつかむ動作をしながら）、足をたくさん動かして（ばたばたする動作をしながら）、おなかが見えました。

児童H はさみのところに割り箸を近づけたら、ぎゅってはさみを伸ばしてきて、びっくりしました。

こうした発言から、「いろいろな方から見る」という観点で観察するには、手に取って持ち上げたり、割り箸を近づけたりするという方法があることを押さえます。そして、それを短冊に書いていきます。

このとき、例えば、「どう書くと、足をたくさん動かしている様子が分かるかな」と投げかけたり、「ぎゅってはさみを伸ばす」という表現を動作とともに確認させたりするよう心がけました。観察したことを、どう表現するとよいかを意識させるためです。この短冊は、第五（九時で観察記録文を書くときに生かすようにしました）。

学習活動を通して、児童は、丁寧に観察するための新たな観点に気づき、具体的な観察の方法を学んでいきました。

しかし、ではこの観点に沿って、具体的にどう観察すればいいのかということについては、児童の理解がまだ不十分なように思いました。そこで、そのことを確認するために、もう一度、みんなで考える場面を設けることにしました。デジタル教科書に収録されている「ワーク」（図2）を使うのです。

ワーク「どこをどのようにかんさつしますか」には、教科書P35に掲載されているのと同じザリガニの写真と、「大きさ」「形」「色」「長さ」などといった、観察の観点を示すカードが用意されています。このカードは、自由に動かすことができます。ザリガニのどの部分を観察するときに、どの観点を意識するとよいのか。そして、そのためにはどんな観察方法があるのか。それらをみんなで考えながら、写真の上にカードを配置していきました。

当時、本学級では、アメリカザリガニの「ザリガニ君」を飼育していました。ですから、ここではそのザリガニ君を、生活科の時間に観察したときのことを想起させます。対象がザリガニなので、動くものを観察するときの観点を押さえることもできます。児童は、写真のザリガニをザリガニ君と呼びながら、意欲的に

4 実践から分かること

本単元では、これまでの体験を想起させながら、みんなで観察の観点やその方法について確認していくために、デジタル教科書を活用しました。児童は、意欲的に学習に取り組み、これまでの自分の経験と結び付けながら、書くために必要な事柄を集める方法を身につけることができたのではないかと思います。

5 デジタル教科書を効果的に使う

授業設計の際には、まず、児童の実態を把握し、その単元や本時のねらいを明確にする必要があります。このとき、デジタル教科書をはじめとしたICT機器を授業に取り入れるべきかどうかを的確に判断するためには、それらの特性を知ったうえで、効果的な活用場面を見極める力が求められます。本連載のバックナンバーや、さまざまな活用事例集を参考にしながら、その力をより高めていくだけであったらうれしいです。

本連載は今号が最終回となります。ご愛読ありがとうございました。